



👁️👁️ みどころ

トルストイの名作『アンナ・カレーニナ』は何度も映画化されているが、ヴロンスキーって一体誰だっけ？また、本作は1904年の日露戦争の場面から始まるが、アンナが不倫に走ったのは1870年代だったのでは？

そんな疑問を覚悟で、ロシア版『アンナ・カレーニナ』が今、日露戦争を絡ませたのはなぜ？そこでの日露戦争の描き方は？そんな深読みはともかく、キャンディーズのスーちゃん（田中好子）によく似た本作のアンナは、なぜ青年将校との不倫にここまで強気になれるの？また、せっかく二人の自由を勝ち取ったのに、なぜ自殺に走ったの？

そんな疑問も多いから、遭遇した“2人の男”の会話から、あの時代の“不倫”のあり方についてしっかり勉強したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■このヒロインは有名！しかし、この男までは・・・？■□■

トルストイの名作『アンナ・カレーニナ』は有名だから、そのヒロインたるアンナの名前は誰でも知っている。もっとも、『戦争と平和』のナターシャ、『復活』のカチューシャ、『アンナ・カレーニナ』のアンナの中で誰が一番有名かと言えば、圧倒的にカチューシャ。それは、大正3年に島村抱月が戯曲化した劇場版『復活』で、松井須磨子が「カチューシャ可愛いや〜別れのつらさ〜」と歌った「カチューシャの唄」が大ヒットしたためだ。

『復活』（01年）は裁判モノとしても面白い（『シネマ4』235頁）が、『戦争と平和』はナポレオンのロシア遠征を含む一大叙事詩で壮大だが難解。それに対して『アンナ・カレーニナ』は政府の高官であるカレーニンの夫人アンナをヒロインとした“不倫モノ”だから最

後には悲しい結末が待っているが、わりとわかりやすい。そして、そんなドラマティックな物語は映画向きだから何度も映画化されており、その最新版はキーラ・ナイトレイが主演した『アンナ・カレーニナ』(12年)だ。同作では物語以上にアカデミー賞美術賞、衣装デザイン賞等にノミネートされた帝政ロシア時代の豪華絢爛たる美しさが注目され、とりわけ舞踏会の美しいシーンは圧巻だったから、それがアンナに訪れる後半の悲劇をより儚いものにしていて(『シネマ30』105頁)。

しかして、本作は久しぶりのロシア人監督、ロシア人俳優、ロシア語による『アンナ・カレーニナ』だが、「ヴロンスキーの物語」という副題はナニ？ヴロンスキーって一体ダレ？『アンナ・カレーニナ』には、アンナの兄嫁の妹キティと田舎の地主リョーヴィンを主人公とする“もう1つの物語”が登場するが、その物語がトルストイの本来の理想の姿であることを知っている人は、相当『アンナ・カレーニナ』を読み込んでいる人だ。そんな人なら、アンナの不倫相手になる貴族の青年将校ヴロンスキーのカッコ良さもよく知っているだろうが、ふつうの日本人はヴロンスキーの名前は知らないのでは・・・？

さらに、何の予備知識も持たないまま本作を観ると、その冒頭で『坂の上の雲』を彷彿させる(?)日露戦争のシーンが登場するのでビックリ。これは、アンナの息子で、今は日露戦争に従軍している軍医のセルゲイ(キリール・グレビンシチコフ)が属しているロシア軍が日本軍に追われて逃げていくシーン。そして、時代は1904年だ。アレレ、アンナが不倫に走った時代は、1870年代ではなかったの・・・？

■□こんな遭遇ってあり？この男からこんな話を聞きたい？■□

本作は、ロシア人監督のカレン・シャフナザーロフがトルストイの名作『アンナ・カレーニナ』に、敢えてロシア人作家ビケーンチイ・ベレサーエフが書いた日露戦争文学の原作を取り入れ1904年の日露戦争の時代と1870年代のアンナとヴロンスキーとの不倫の時代を交差させながら描いたもの。そのため本作は、セルゲイが率いる部隊が張るキャンプに、左足を負傷したヴロンスキー大佐(マクシム・マトヴェーエフ)が運ばれ、今は成長し、軍医になっているアンナの息子セルゲイと、アンナのかつての不倫相手ヴロンスキーが、医師VS患者として遭遇するところから物語がスタートする。正直言って俺はあんたを憎んでいる。セルゲイがヴロンスキーに対してそう言い放ったのは当然だが、それと、軍医として患者の治療に当たるべき義務とは別問題。二人のそんな関係が始まる中、「人は記憶を捏造する。愛の真実は無数にある」と前置きしたうえ、ヴロンスキーは1872年の冬から始まったアンナとの不倫物語を語り始めることに。

しかし、いくらなんでもこんな遭遇ってあり？また、この男からこんな話を聞きたい？『アマデウス』(84年)は、老齢に至った宮廷音楽家サリエルの口から、『初恋の来た道』(99年)(『シネマ5』194頁)は母親の葬儀のため田舎に戻ったかつての教師の口から、それぞれ回想談が始まったが、本作では、1872年に始まった不倫物語の回想が190

4年の日露戦争の激戦地で始まる。そして、『アマデウス』も『初恋の来た道』もあくまで当事者本人の回想談だったのに対し、本作はセルゲイの“おねだり”に答えた形でヴロンスキーが回想するものになっている。自分一人だけの回想ならウソ偽りなく正直に語れるだろうが、聞き手がおり、しかもそれが不倫相手の息子というモロに利害関係が絡む中、ヴロンスキーの回想談はどこまでがホント？ひょっとして捏造部分も・・・？そんな心配も大いにあるが・・・。

■□■人妻と青年将校の恋は不倫！そのドロドロ感は？■□■

アンナは誰かに似ていると思ったら、それは1970年代を風靡したキャンディーズのスーちゃんこと田中好子だ。スーちゃんはランちゃんとミキちゃん3人の中でおとなしめだったが、本作に見るスーちゃん似のアンナの発言や行動はかなり突出しているから、それに注目！

アンナの夫カレーニンは政府の高官。そのため、たとえ妻の浮気、不倫が発覚しても、それが世間の噂にならなければ我慢しようと考えていた。ところが、夫のそんな“配慮”にもかかわらず、あるいはそうやって“配慮”されればされるほど、アンナの行動は過激になっていくので、それに注目！11月3日に観た『ビブリア古書堂の事件手帳』（18年）では東出昌大扮する作家志望の青年、田中嘉雄は人妻絹子との恋に夢中になったが、嘉雄の子供を妊娠した絹子は夫の深い愛を知り、結局嘉雄への思いを断ち切っていた。しかし、アンナの場合は、夫が冷静に「私の体面が傷つかない限り、我々の関係は何も変わらない。私は自分の名誉を守る。」と言ってくれたにもかかわらず、次々とそれを無視する行動に。渡辺淳一の『失楽園』は小説でも映画でもTVドラマでも妻帯者と人妻との不倫のドロドロ感が際立っており、日本国民の多くがそれに夢中になったが、本作中盤では、人妻アンナと青年将校ヴロンスキーとの不倫とそのドロドロ感、そしてそれを連日見せつけられる夫カレーニンの苦悩をしっかり楽しみたい。

■□■離婚協議とその条件は？婚外子の出産後は？■□■

私はある離婚事件で、①離婚調停／②離婚請求訴訟、③子供の引渡請求の審判とその仮処分、④子供の監護権者の指定の審判とその仮処分、⑤婚姻費用請求の審判、⑥同居請求の審判、⑦離婚請求権不存在確認請求訴訟、とあらゆる手続をとった。それに対して本作では、厳禁していたにもかかわらず、アンナがヴロンスキーを自分の屋敷に出入りさせていたことを知って怒りを爆発させたカレーニンが“離婚”を口にしたところから、離婚条件とりわけ一人息子セルゲイの監護・養育権者を巡る協議が始まる。カレーニンが一人息子を渡さないと主張したのは、あの時代の家々跡継ぎのことを考えると当然だが、協議が難航する中で、アンナはヴロンスキーとの間に女の子を出産したから、離婚条件はますますアンナが不利になることに。

こうなれば、アンナもセルゲイの養育権について納得せざるを得ないだろうと思いがながら見ていると、出産後のアンナは産褥熱で苦しめ、生死をさまよったから、カレーニンもヴロンスキーも大困惑。その結果、カレーニンは妻のすべてを許す決意を固め、これからも妻に寄り添っていくと決心したから、すごい。そこにはきっと宗教的なバックボーンもあったのだろうが、私たち日本人にはカレーニンのこの大変身の理由は容易にわからない。他方、それにショックを受けたヴロンスキーは自ら拳銃を頭に向けたが、さてその顛末は・・・？

■□■男女関係は常に変化！弁護士45年の経験では？■□■

トルストイの『アンナ・カレーニナ』は人妻アンナと青年将校ヴロンスキーの不倫物語が軸だが、他方で田舎の地主リョーヴィンとキティとの地道で手堅い恋模様と心安らかな生活の確保というもう1つの物語の軸がある。そして、ジョー・ライト監督、キーラ・ナイトレイ主演の『アンナ・カレーニナ』ではそれがきっちり描かれていた。しかし、「ヴロンスキーの物語」とサブタイトルをつけた本作では、バツサリそれを切り捨て、日露戦争で遭遇したヴロンスキーとセルゲイの会話に並行させながらアンナの不倫と三角関係を描いている。

前述したように、カレーニンが態度を180度転換すれば、アンナも元の鞘に収まるの？普通はそんな想定も可能だが、アンナの列車への飛び込み自殺で終わるというストーリーを変えるわけにはいかないから、そんなハッピーエンド的展開は不可能だ。しかして、アンナは健康が回復し始めると、やはり夫への嫌悪感は消えなかつたらしい。また、ヴロンスキーも自殺未遂の痛手から立ち直ると、再びアンナを想う気持ちが強まってきたらしい。その結果、アンナとヴロンスキーは娘のアーニャと共に田舎での静かな生活を開始しようとしたが、これなら2人にとって理想的！弁護士45年の私の体験ではそう思えたが、男女の関係は常に変化するものだ。

■□■アンナはなぜいつもイライラ？自殺の理由は？■□■

やっと田舎での3人の生活が始まるのが決まったのに、なぜアンナはいつもいらだっているの？娘アーニャを中心とした3人の生活が得られるのなら、セルゲイへの未練は断ち切らなければ・・・。私はそう思うのだが、アンナにはそれが難しいらしい。また、田舎に住むためには資金の工面を含めていろいろな準備が必要だから、ヴロンスキーがそのことを母親に依頼している中、若い令嬢が書類を届けにくると、なぜかアンナはイライラ・・・。こりゃちょっとアタマがおかしいのでは・・・？ここらあたりのアンナの言動はかなりヒステリックかつエキセントリックになっているのが気がかりだ。さあ、それは一体なぜ？他方、一度は「これからも妻に寄り添う」と決意したはずのカレーニンの気持ちも、アンナが今なお自分に対して嫌悪感を持ち続けていることを知ると、再び揺らぎ始

めることに・・・。

小説のラストでは、アンナは列車に飛び込んで自殺することになるのだが、それは一体なぜ？それは結局謎のままだし、ヴロンスキーにもわからないらしい。すると、そんなヴロンスキーから母親の不倫と自殺の話が聞かされても、息子のセルゲイは納得できないのでは・・・？本作ラストではそんな“モヤモヤ感”の中で、ヴロンスキーが“ある決断”をするので、それに注目！日露戦争の“日本海海戦”では、戦艦三笠の艦上で連合艦隊司令長官・東郷平八郎は“ある決断”をしたが、さて本作に見るヴロンスキーの“ある決断”とは・・・

2018（平成30）年11月26日記